この本の内容

●この本の著者の蟹江憲史（かにえのりちか）さんはＳＤＧｓ研究の第一人者で、国際政治や気候変動の問題などを研究しています。

●ＳＤＧｓは、国連サミットで採択された「持続可能な開発目標」の略称です。

●ＳＤＧｓは、人類と地球の未来のために、２０３０年までに達成することを目指して掲げられた目標です。

●この本では、ＳＤＧｓがなぜ必要なのか、どのようなものなのかをわかりやすく説明します。

目次

この本の内容
はじめに　今、身の回りで起きていること　1
1　SDGsってなんだろう　13
2　SDGsの生い立ち――経済・社会・環境が一体化するまで　43
3　17目標達成を目指して　49
おわりに代えて　117
SDGsを知るために　122

https://www.un.org/sustainabledevelopment/

The content of this publication has not been approved by the United Nations and does not reflect the views of the United Nations or its officials or Member States.

はじめに　今、身の回りで起きていること

コロナ危機があぶりだした持続不可能な世界

２０２０年突如として襲った新型コロナウィルス感染症。これまでの生活を一変させるこの出来事に、みなさんも驚いたことでしょう。みなさん自身もそうですが、学校や家族のみんなも色々な形で影響を受けたことと思います。

まず、学校が休校になりました。今までこんな形で休校になることはなかったので、本当にびっくりしたことでしょう。最初はお休みが増えて喜ぶ人もいたかもしれません。でも、休みが長引くと、友達にも会えないし、勉強も遅れてしまう。特に受験を前にした学年のみなさんは、困ったり、焦ったりしたことでしょう。

さらに、自宅にとどまる「おうち時間」を過ごすことが勧められ、できる限り人との接触を避けることが大事だと言われました。そうなると、野球やサッカーのようなスポーツや部活動も中止になりました。もちろんこれは、感染しないためには大事なことです。感染は人と人との接触によって広がるからです。でも、好きなことができなくて、もどかしい気持ちになった人もいることでしょう。やりたいことができずに、ストレスがたまった人もいると思います。

今までできていたことができなくなる。これが「持続可能でない」状態なのです。「コロナ禍」といわれる、新型コロナウィルス感染症による様々な悪影響は、こうして持続不可能な状態を色々なところで生み出していきました。つまり、それまでの世の中にあった色々な「持続不可能」なことが、コロナ禍によってあぶりだされていったのです。

休校になると、地域によって、あるいは学校によって、オンラインでの授業が進められたところもあるでしょう。

実は、1人1台の端末を持ち、高速で大容量の通信ネットワークを活用して教育を進める「GIGAスクール構想」というものがあります。日本の学校の授業でデジタル機器が使われる時間数は、世界の先進国(OECD加盟国)の中で、実は最下位だということがわかっています(2018年)。「日本は先進国なのになぜ!?」と思う人もいるでしょう。しかも、日本の中でも、地域によって端末整備状況が大きく異なっています。こうした状況を変えようと、GIGAスクール構想が進んでいますが、そのさなかにコロナ禍がやってきました。教育のデジタル化は、コロナ禍に間に合わなかったのです。

こうして、オンラインで授業を行い、持続的に授業を進められた学校と、そうでない学校が出てきてしまいました。また、生徒の中でもデジタル機器を持てる人と、持てない人との差が生まれてしまいました。

みんなが公平に教育を受けることもまた、持続可能な社会には欠かせません。教育を受けられるか受けられないか、というところで差が出てしまって

は、本来勝負すべき能力の発揮の前の段階で勝負がついてしまうことになり、公平ではありません。公平でないと、色々なところに不満が出てきてしまい、社会が持続可能にならないのです。

コロナ禍のオンライン授業の導入一つをとっても、このような形で持続不可能な社会があぶりだされていたのです。

コロナ禍は、その他にも色々な影響をもたらしました。

学校が休校になり、家に家族みんなでいる時間が増えました。子どもが成長して、自分で色々なことができる年齢になっていれば、親が自宅でオンラインで仕事(テレワークといいます)をしていても何とかなるでしょう。でも、子どもがまだ小さくて、1人では何もできないとどうでしょう。とても家での仕事が手につきません。それでも、親が2人いて役割分担ができたり、おじいちゃんやおばあちゃんと一緒に住んでいたりして、大人の手がたくさんあればまだ何とかなるかもしれません。でも、いわゆるシングルマザーといわれる母親だけの家庭など、ひとり親の家庭の場合だと、仕事が手につかな

くなります。子どもを放っておくことはできないからです。

それでも、夜、子どもが寝た後にでも仕事ができれば、まだ何とかなるかもしれません。しかし、そうした家庭で、しかも親の仕事が自宅でできないものだったとしたら、親が仕事に行くことができなくなります。社会全体でそうした状況を支える社会保障の仕組みが出来上がっていれば、それでも何とかなるでしょう。しかし、日本ではコロナ禍でこのようにして仕事の持続が困難になってしまったケースがたくさん出てきました。

日本は先進国ですが、貧困状態にある人が6人に1人程度いるといわれています。また、子どもの貧困も7人に1人程度いると言います(『2019年国民生活基礎調査』)。コロナ禍はこうした状況をさらに悪化させていったのです。

こうして色々な人の生活がコロナ禍で苦しくなっていきました。できるだけ移動をしないようになると、交通機関にも影響が及びます。外食を控える

ようになると、レストランやカフェといった外食産業にも影響が及びます。

しかも、一時的なことですぐに終わればまだしも、1年を過ぎても、なお続くような影響をもたらしているのがコロナ禍です。まさに、コロナ禍でも日常生活を続けられるようになっていたかどうか、つまり、コロナ禍のような事態が生じても持続可能なのかどうか、ということが、経済や生活の明暗を分けてしまったことになります。

様々につながる影響の鎖

ある事の影響が、色々なことにつながっているというのは、新型コロナウイルスの影響だけにとどまりません。例えば、みなさんが夏の暑い日に手に取るスポーツドリンクも、様々な持続可能性につながっています。

近年の夏の暑さにはすさまじいものがありますね。30℃の真夏日を超えて、35℃の猛暑日に、さらには40℃を超えて気温が上がる日もあります。こうした酷暑は気候変動の影響だといわれます。

そんな時に運動を行うと熱中症の危険があるので、小まめな水分補給が勧(すす)められます。それは、自分の身体を守るためには大変大事なことです。さてそのような時、みなさんはどのように給水を行いますか？　学校や運動場にある水道水という場合もあるでしょうが、よりよく身体に水分を吸収させるために、ペットボトルに入ったスポーツドリンクのような飲み物を買う人も少なくないでしょう。

そのペットボトル、ほとんど(2017年で90％以上)が、プラスチックと同じく石油を原料としてつくられたものです。飲み終わったペットボトルをそのまま捨てると、ごみ処理場で燃やして処理しても、温室効果ガスを排出(はいしゅつ)する原因になってしまうのです。つまり、気候変動によって暑くなった世界に対応するために、ペットボトルの飲み物を飲みます。でも、そのこと自体がまた、気候変動をさらに進ませることになってしまうのです。

あるいは、ごみ箱に捨てたとしても、風が強くてごみ箱が倒(たお)れてしまい、ペットボトルが飛び出してしまうこともあるでしょう。なかには、あるまじ

きことですが、ポイ捨てをする人だっています。川や海岸に、そうしたペットボトルを見かけることもありますね。捨てられたペットボトルは川から海に流れ、海を漂います。それはやがて太陽の光や熱で分解されて、マイクロプラスチックという非常に小さなプラスチックの粒になります。こうしたプラスチックがまた厄介です。それらを海の生き物や鳥たちが食べてしまい、生き物に害を与えることが増えています。あるいは、生き物が食べる餌の中に小さなプラスチックが入り込み、身体の中で害を与えることもあります。そして、そうした生き物の中には、人間も含まれているのです。つまり、みなさんは、間接的に自分の捨てたプラスチックを食べているかもしれないのです。

あるいは、夏の暑い日に、同じように酷暑から自分の身体を守るために、冷房を使うことでしょう。近年では、酷暑の日には、寝る時にも冷房を使うように呼びかけられることもあります。気候変動に対処するための知恵の一つです。

ところがここでも、つながりがあります。冷房を使うにはエネルギーが必要ですが、そのエネルギーは何からできているのでしょうか？　２０１８年時点では、日本のエネルギーの85％強が石油や石炭などの化石燃料からできています（資源エネルギー庁「総合エネルギー統計」より）。化石燃料は温室効果ガスを排出するので、ここでもやはり、目の前の気候変動に対処をすることが、かえって気候変動を進ませることにつながってしまっているのです。

近づく地球と社会の限界

私たちの身の回りには、このように、１つのことや取り組みが、別のことにつながっていて、そのことが社会全体を持続可能ではなくしてしまっている、ということがたくさんあります。世界はグローバル化して、他の国でできたものがすぐに日本で手に入ったり、世界のどの国にもひと飛びでいけるなど、大変便利になりました。なによりも、グローバル化は経済的な豊かさをもたらしてくれました。しかしその一方で、モノをつくる原料やエネルギ

ーもたくさん必要になりました。たくさんのモノが必要になるということは、その原料や、モノを運ぶ手段といった、別のモノやコトもたくさん必要になるということを意味します。そして、捨てるモノも多くなるということも、意味するのです。

今の世の中は大量にモノを生産し、大量に消費することで経済が回っています。そして、産業革命以降の世界では、生産や運搬、消費を動かすエネルギーの元にあるのは、化石燃料なのです。1つのことが別のことにつながり、使う原料やエネルギーの量が加速度を上げて増えていきます。その結果として、地球に大きな負荷をかけてしまっていたのです。

それでも、人間の活動範囲が地球の大きさに対してそれほど大きくない間は、何とかなっていました。でも、今や人間の活動範囲が広がり、さらに世界人口も増え続けています。今や約70億人の世界人口は、さらに90億人を超えるまで増えると予想されています。そのような世界で、地球の大きさに対して人間の活動があまりにも大きくなりすぎてしまったのです。